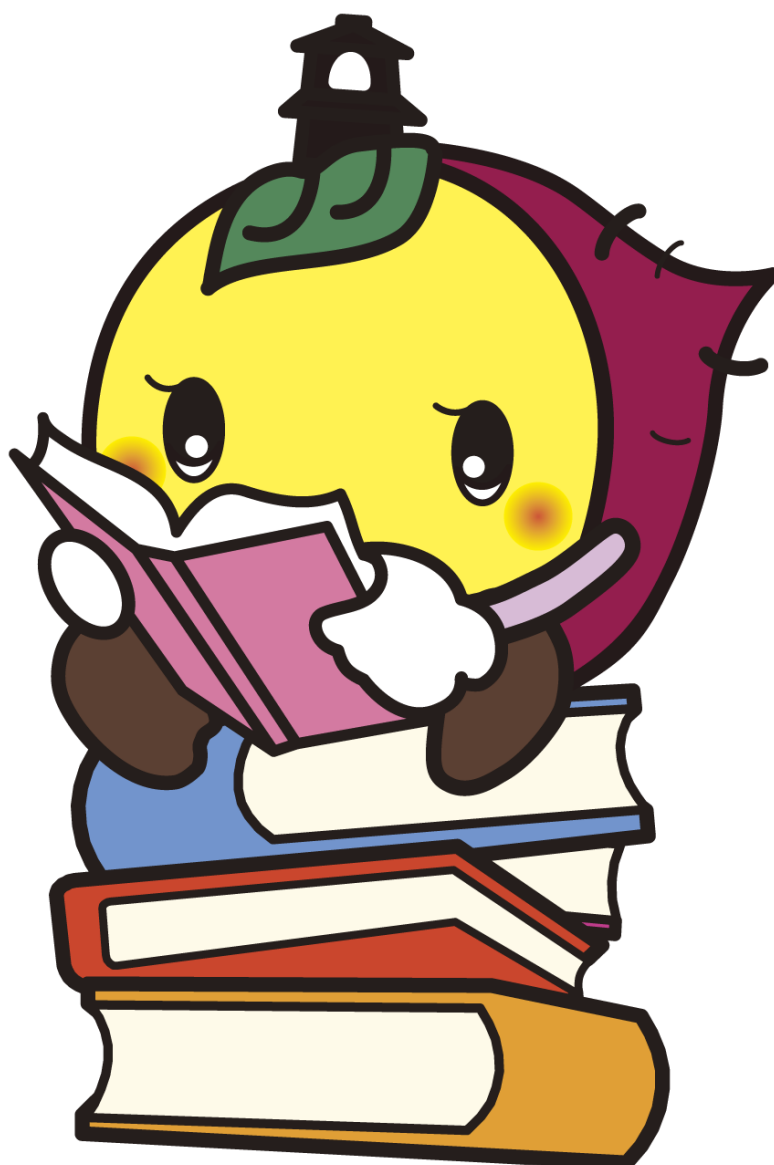


令和7年度 川越市少年の主張作文
～未来を担う私たちが、いま思うこと～

入選作品集



川越市マスコットキャラクター ときも

主催 川越市青少年を育てる市民会議、川越市、川越市教育委員会

はじめに

「川越市少年の主張作文」は、青少年が日常生活の中で考えていること、感じていることを広く社会に訴えることにより、同世代の青少年の意識啓発と、青少年の健全育成に対する大人の理解と関心を高めることをねらいとして、昭和 62 年度より実施しています。

市内在住・在学の青少年を対象に募集を行い、今年度は中学生の部 1,246 編、高校生及び一般の部 108 編、総計 1,354 編と多くの応募がありました。応募作品は「将来の夢や希望」「人間関係」「部活動などの学校生活」「社会の問題」などについて、様々な視点から捉えられた内容で、力作揃いでした。また、今年度は、「平和」「環境問題」「AI」といった世界情勢や身の回りの出来事を反映した内容の作品が多くありました。皆、自分が考えたこと、思ったことを素直な言葉で表現し、自ら体験したことや調べたことへ結びつけた説得力のある作品であり、情報が多様化した時代を生きる青少年が、社会や自分を見つめる良い機会になったことと思います。

審査会による厳正な審査により、応募作品のうち 14 編が入選作品として選ばれ、その中から最優秀賞 1 編、優秀賞 2 編を決定しました。この作品集は、入選作品 14 編をまとめたものです。青少年が心に抱く 14 編の主張は、お読みくださった方々の心にはどのように響きますでしょうか。

川越市青少年を育てる市民会議

【審査員】

審査員長	岡本 紘子	(川越市青少年を育てる市民会議 副会長)
	稲葉 優	(川越市立仙波小学校 教諭)
	有菌 奈緒美	(川越市立大塚小学校 教諭)
	八代 和泉	(川越市立霞ヶ関北小学校 教諭)
	木村 彩香	(川越市立初雁中学校 教諭)
	小林 裕子	(川越市立南古谷中学校 教諭)
	鈴木 陽汰	(川越市立霞ヶ関西中学校 教諭)
	平川 久美子	(川越市立山田中学校 教諭)

もくじ

◆最優秀賞◆

平和への想い

川越市立霞ヶ関西中学校 3年 前田 菜摘 …………… 1

◆優秀賞◆

笑顔の力

川越市立川越西中学校 3年 眞田 晴彩 …………… 2

裏方役者

秀明高等学校 2年 吉澤 あい …………… 3

◆入選◆

(中学生の部)

もう二度と繰り返させない

川越市立富士見中学校 3年 長澤 璃奈 …………… 4

ビートルズが繋げた心

川越市立野田中学校 3年 榊原 千尋 …………… 5

努力が可能性を広げる

川越市立野田中学校 3年 濱崎 茅凧 …………… 6

私の将来の夢

川越市立芳野中学校 3年 小池 結衣 …………… 7

私の長い病との戦い

川越市立高階西中学校 2年 松下 朔也 …………… 8

将来

川越市立高階西中学校 3年 阿曾 莉己 …………… 9

選挙の大切さについて

川越市立砂中学校 2年 近藤 久義 …………… 10

私にとっての「学ぶこと」

川越市立霞ヶ関西中学校 3年 冨田 望結 …………… 11

繋げたい想い

川越市立川越西中学校 2年 長谷部 莉央 …………… 12

地域コミュニティの大切さについて

川越市立鯨井中学校 3年 松永 悠佑 …………… 13

(高校生及び一般の部)

僕が勉強する理由

秀明高等学校 1年 萩原 大和 …………… 14

◆ 最優秀賞 ◆

平和への想い

川越市立霞ヶ関西中学校 3年 まえだ なつみ 前田 菜摘

「平和」とは何なのだろう。自分、家族、もしくは友達が健康に暮らせていたら、それは「平和」と呼べるのだろうか。

私は父親の仕事の都合で、発展途上国の代表格ともいえるインドに1年半ほど滞在していた。インドは先進国と比べると、インフラや貧困において課題が多いこと、そしてスラム街などがまだまだたくさん存在していることなどから、発展途上国に分類されている。しかし一方で、IT産業などは急速に発達しており、世界の経済を牽引している重要な国であることも確かだ。そんな国で暮らしていた日本人である私は、平和についてよく考えるようになっていた。なぜなら、日本で暮らしていたときには想像もつかないことが実際に私の身に起こったからだ。

ある休日に、家族と近くの市場に買い出しに出かけた。市場はとても大きく、さまざまな店が立ち並び、活気にあふれていた。そこでは、ある男性が小さなカートのようなものに乗って、その市場を回っていた。近づくと、彼は両手足がなく、全身に火傷の痕が広がっていた。男性は物乞い、あるいは募金活動のようなことをしていた。その光景は日本ではまず目にすることがないもので、私は驚きを隠せなかった。その後、小さな子どもが物乞いをして近づいてきた。現地の人曰く、同情してお金を渡す人が多いが、そのお金は親に奪われ、タバコ代やお酒代に使われているのがほとんどだという。自分よりも小さい子が物乞いをしてお金を稼ぎ、そのお金でさえ自由に使えないこの世界は、あまりに不平等だと感じた。

胸の奥で何かが動いたように感じた。日本で暮らしていたら、授業やニュースでこのようなことを知ったとしても、自分には関係ないだろう、と心のどこかで思っていたかもしれないと想像できたため、恥ずかしさを強く覚えた。

その日以来、教育や栄養、治療を十分に得られない人々の存在から目をそらし、たとえ故意でなかったとしても、単に母国に戦争がなく、自分や知り合いが健康であるからと、世界を平和と呼ぶことは、あまりにも浅はかであると考えようになった。

それから私はボランティア活動や募金活動に興味を持つようになり、インドの学校で友達と文化祭で得た利益を寄付する活動を行った。私たちが運営した露店は、プレスレットをカスタマイズして購入できるというものだった。材料を集め、金額を設定することからすべてグループで考え、無事当日を迎えた。利益は少ししか上がらなかったが、実際に私たちの手でお金を渡したとき、とても大きな達成感に包まれた。その他にも、使わなくなった服を貧しい人に寄付し、また日々の生活を送ることすら難しいような低賃金の人たちにチップを渡す際、少しでも収入の助けになるよう、少しでも多く渡すことを心掛けた。ささやかな取り組みかもしれないが、「何もしない」という選択を取らないことが、私ができる平和に貢献する第一歩だと思う。

一般的に「平和」を英語に訳すと「Peace」となり、多くの日本人は「Peace」の意味は「平和」だけだと思いがちだが、実はさまざまな意味がある。その中の一つが「安心」である。平和と呼べる世界は、全人類にとって安心して暮らせる世界だと私は考える。私たちが身近な人を思いやるとともに、ニュースなどを通して世界の情勢に関心を向け、自分にできることを一つひとつ行うことが平和につながると信じている。

あなたにとっての平和とは何だろうか。そして、その平和を守るために、自分には何ができるのか。少し立ち止まって考えてみてほしい。

◆ 優 秀 賞 ◆

笑顔の力

川越市立川越西中学校 3年 さなだ 眞田 はるあ 晴彩

私はこの夏、所属していた卓球部での活動を終えた。今、振り返ってみると最後の1年間で卓球部はとても成長した。その原動力は何だったのかということに気づいた。それは「笑顔の力」である。

昨年の夏に3年生の先輩が引退した直後、団体戦に出場するのが初めてという同級生や後輩たちと県大会団体戦に臨んだ。先輩たちが残してくれたシード枠での出場となったが、格上の相手に完敗だった。試合が始まる前から、負けて当たり前という気持ちもあり、試合を楽しむよりも緊張の方が大きく、あっという間に終わってしまった。

しかし、1年後には県大会予選、県大会でシード校を破り、関東大会に出場することになる。

卓球部は普段から学年に関係なく仲間意識が強く、厳しい練習でも笑顔が多い。その1年間の練習で培った技術を基にそれぞれが普段以上のプレーをできたのが今年の県大会予選の団体戦である。得点を取れば全員が笑顔で声を出して喜び、ミスをしたらも笑顔で「大丈夫」と応援をする。試合を全員で楽しむことができたからこその優勝という結果であった。格上の相手にひるむことなく、笑顔で声を出して元気にプレーをしたことで、いつも以上の力を発揮できたのである。

私は卓球のクラブチームにも所属しているので、そちらの試合も多数経験している。その際、選手に対して怒っている監督を目にすることがある。怒られて笑顔が消え、こわばった顔でプレーする選手は、変な力が入ってしまい普段通りのプレーをすることが難しい。しかし、選手を励まし、一緒に笑顔で応援する監督やチームメイトのもとでプレーをする選手は良い結果につながっていくことを何度も見てきた。

卓球は心理戦である部分が大きい。相手の表情や体の動きがよく見える距離で戦うのだから、ちょっとした動きで相手に作戦を悟られないようにしたり、逆に相手を観察して苦手なコースを探ったりする、対戦相手が弱気になっていることが分かれば自分はやりやすくなるし、自信をもって元気にプレーをする対戦相手とはやりづらいのである。

私自身も関東大会においては経験したことの無い緊張感に包まれ、かなりこわばった顔で普段通りのプレーが出来ずに最後の試合を終えてしまった。

今振り返れば、そこに笑顔が足りなかったことを反省できるのだが、その時はまだ「笑顔の力」に気づいていなかったのが悔やまれる。

アメリカの哲学者ウィリアム・ジェームズ氏は「楽しいから笑うのではない、笑うから楽しくなるのだ」という言葉を残している。

楽しくて自然に笑顔がでるときはそのままでよいのだ。緊張するときや、様々な試練で逃げ出したくなるようなときにこわばった顔でいるのではなく、笑顔で「大丈夫」と言ってみると前向きになれると思う。

もちろん、辛い時、悲しい時に無理に笑顔を作らなくてもよい。しかし、自然と顔がこわばるような状況になったときに、その状況を変えたい、前向きになりたいという気持ちがあるのなら、笑顔は無限の力になると思う。考えてみると、いつも笑顔のイメージがある人の周りにはたくさんの人が集まっている。一人の笑顔は周りにも笑顔と幸せをもたらす効果があるのだろう。

中学生の私がこれから経験する様々な試練やチャレンジを笑顔の力で乗り越えていきたい。ときには周りの笑顔の力も借りながら。

◆ 優 秀 賞 ◆

裏方役者

秀明高等学校 2年 よしざわ 吉澤 あい

私は中学生の頃から演劇部に所属している。といっても、舞台上上がって観衆の前で演技したことはない。私の主な仕事は音響、つまり裏方だ。みなさんは、裏方と聞いてどのような印象を持っただろうか。というのは、私が周りの人に「演劇部に入って裏方をやっている。」という話をすると、役をもらえなかったんだな、と解釈されることがあるからだ。確かに、観客席から見える舞台上で輝くのは物語を作る役者であり、その役者はオーディションを経て選抜されるため実力を要する。そしてその分、積み上げる日々の練習も、本番前に抱える緊張も想像以上のものだろう。私が入部時に役者ではなく裏方を志望したのもそのような負担に怖じ気づいたからだった。しかし入部して数年、音響担当として観客にどう感じて欲しいかを考えながら黙々と曲を探し、役者とタイミングを合わせられるように調整する中で、観客に喜んでもらうためのよりよい舞台を作ろう、という同じ意識を持った仲間の一人になったような気分になった。今の私はずっと裏方仕事ばかりやってきたことを胸を張って説明できる。裏方が舞台を作る上で占める割合も、そのための労力も、劇が終わった後の達成感も役者には敵わないであろうと思うことは変わらない。変わらないが、だからこそ精一杯舞台をよりよくするためにできることを探して行動することは私の誇りとなった。

そうして裏方を3年以上続けていくうちに、このような「小さな力」に注目するようになった。思えば、私たちの学校にも食堂で働く人や校舎を清掃する人など、目立たないが私たちの生活を支えてくれる力強い存在がある。そのような人たちは言わば「裏方」だ。彼らの名前が人々の記憶に残り続けることはあまりない。そしてそれは仕方のないことだと感じる。しかし同時にそのような立場の中で自分の仕事に向き合い、懸命に役割を果たす姿は格好よく、私たちの生活や社会が彼らの確かな労の上にあることを強く意識したいと思った。

「一隅を照らす」という言葉がある。天台宗の開祖、最澄の言葉で「自分のいる場所で精一杯努力し、輝くことで周囲の人々を照らし、それがやがて世の中全体を明るくする」という意味だ。今できることを最大限に。この言葉を知り、そういう全力の生き方をしたいと考えた。

私の将来の夢は医師になることだ。しかし医師になることはあくまでも目標のための通過点に過ぎないとも言えるだろう。私たちが暮らす現代社会は暗いニュースで溢れ返っている。貧困、飢餓、環境破壊、差別、戦争。SDGs というものが、現代の社会課題の多さと複雑さを物語っている。この社会をただ自分が一生を過ごすための足場とするのではなく、未来に繋がる場にするために、未成年であり、社会に与えられる影響の小さい私が今できること、それが医師を目指すことだと考えた。医師という立場を手に入れたら、その日その日を惰性で暮らすのではなく、小さなことでも自分が今社会のためにできることは何かを考え続けたい。そうしていくうちに社会の中での自分の在りどころを知ることでもできるのだろう。例え人に気づかれなくても「裏方」の人間であっても、遠くない未来のためにできることをする、それが私の理想の姿だ。

もう二度と繰り返させない

川越市立富士見中学校 3年 ^{ながさわ}長澤 ^{りな}璃奈

私は、今年の夏に学校代表として広島のパワー事業に参加しました。目的はただ一つ。世界で最初に原子爆弾が落とされた広島を自分の目で見て過去と向き合い、たくさんの人に継承していくことです。

炎天下の中、私は原爆ドームの前に立ちつくしました。77年以上の歳月を超えてもなお、当時の投下された痛ましい様子を語っていました。「二度と過ちを繰り返すな」と。平和記念資料館では、焼けただれた服、被爆者の描いた絵、中身が焼けこげたお弁当などを見て、胸が張りさけるような思いになりました。昨日まで生きていた人々、命、未来が一瞬にして奪われた見苦しい光景。それはまさに、地獄絵図でした。

広島、そして長崎は、ただの出来事ではありません。人間が引き起こした地獄です。原爆は建物や人だけでなく、人々の人生を奪い取りました。私は、こんな残酷なことが現実にあったという事実で涙が止まりませんでした。もう二度と、繰り返してはいけないことだと強く思いました。

しかし、その悲劇から80年経った今でも、世界では戦争が続いています。ロシアとウクライナの紛争、パレスチナとイスラエル、スーダンやイエメンなどの内戦。スマートフォン一つで、その惨状を見ることが出来る便利な時代に生きています。とはいえ、自分で「感じて」いるだろうか。ただのニュースだと流し、どこか遠い国の出来事として片付けてはいないだろうか。私は広島で学びました。戦争を知ることは単なる知識ではなく、自分の問題として考える力である。だから私は、戦争を「過去の教訓」と捉えるのではなく、現在の行動にどう繋げるか考えなければならないと思います。

では、私たち未来を担う若者に何が出来るのか。それはまず、積極的に知ろうとすることです。学校やニュースで見るだけでは足りません。実際に広島や長崎に行き、目で見て感じてください。資料を読み、証言を聞き、世界の現状に目を向けてください。戦争が起きるきっかけや、戦争が引き起こす被害など、インターネットで得られる情報だけでなく、直接調べ、自分で考えることが大切です。次に、自分の考えを伝えることです。私はこのように、広島に行った経験を語っています。実際に行ったことのある人にしかできないことで、信ぴょう性が高いと思います。家族だけでなく、クラスメイトや親戚にも話しました。興味を持ってくれるか不安だったけれど、「知らなかった。行ってみたい。」と言ってくれる人が何人もいました。こういった小さな行いでも、確実に意識は広がります。私たちが語り手になり、過去を今に、今を未来に繋げていくことができます。

最後に、選挙に行くことです。「一人の力では変わらない」と思う人もいるかもしれませんが。しかし、たかが1票、されど1票です。多くの人が同じように考え、行動することで、選挙の結果を大きく左右させる可能性があります。どのような政策が戦争を防ぐか、平和について考え、国民を守る政治家を見極めて、選びましょう。私が選挙権を持ったら、必ず投票すると心に決めていきます。なぜなら、私の1票が今後の日本を変えていき、未来をつくるからです。

「戦争をなくしたい」。私は本気で願い、行動に移しています。それは理想論であると思う人もいるかもしれませんが、一人ひとりが戦争について関心を持ち、平和のための行動を続ければ、必ず実現すると思います。また、学校などで差別や偏見をなくすことを心がけ、命を尊重することも大切です。

私は、自分にできることを行い、まわりの人に伝えていきます。あの日見た原爆ドームや資料館での光景が忘れられないからです。戦争は誰かが止めてくれるものではなく、私たちが止めなければならないと強く思います。

◆ 入 選 ◆

ビートルズがっつけた心

川越市立野田中学校 3年 さかきばら 榎原 ちひろ 千尋

私はビートルズが大好きだ。少し古いメロディーなのに、いつも聞くたびにどこか新鮮な感じがするし、聞いていてとても心が落ち着く。学校で嫌なことがあった日や、部活で疲れた日などそのたびにそっと耳元で聞こえる彼らの歌に救われてきた。

ビートルズとの出会いは中学1年生の夏。映画の影響で、「クイーン」や「ザ・フー」などイギリスのロックバンドにハマっている私に父が勧めてくれたのだ。初めて『ヒア・カム・ザ・サン』を聞いたとき、言葉では言い表せない感動をしたのを今でも覚えている。それからというもの、ビートルズは私の一部になった。

そんなある日、ALTの先生と音楽の話をする機会があった。先生はイギリス出身で、私が「ビートルズ好きなんです。」と伝えると、先生の目がキラキラとしたのがわかった。すると、先生はおすすめのビートルズの曲を紙にリストにして教えてくれたり、たまにビートルズ以外のイギリスの音楽も教えてくれた。私も、英語で教えてもらった曲の感想を書いてわたした。英語で感想を伝えるのは大変だったけれど、現地の人がおすすめするビートルズの曲はマイナーなものが多くて、どんどん私の中にビートルズが広がっていくことが嬉しくてたまらなかった。先生が教えてくれた曲の中でも特に好きな曲は、ビートルズの『オール・マイ・ラヴィング』だ。他にはない唯一無二のメロディーと美しい歌詞は、いつも私の心を震わせ、勇気を与えてくれる。会話している中で先生は「あなたはいつかイギリスに来るべきだ。来たら私が案内します。」といった。私は嬉しくてたまらなく、先生にいつかイギリスに行くことを約束した。

その約束は私の中で大きな支えになった。先生はもう学校にいないけれど、あの時の約束は今でも私の心の中に残っている。英語を頑張る意味が、あの瞬間はっきりした気がした。テストの点のためだけではなく、将来のために勉強していることをそのとき初めて実感することができたのだ。ビートルズがくれた出会い、ALTの先生がくれた言葉。それは、音楽が国境を超えてつなげてくれることを教えると同時に、私に勉強をする意味を教えてくれた。

今は受験生で、大変なことばかりだが私は先生との約束を果たすために、今日もビートルズを口ずさみながら机に向かう。

努力が可能性を広げる

川越市立野田中学校 3年 ^{はまさき}濱崎 ^{ちな}茅凪

生まれた時点で、その人の可能性は決まっているのだろうか。私は背が低く、腕も足も短い。そんな私は水泳を小学校低学年から続けている。私はスイミングスクールでもダントツで背が低く、友達にもよくからかわれている。しかし、あまり知られてはいないが、水泳も高身長の手先のほうが断然有利なのである。例えばオリンピック金メダリストの北島康介さんは178cmだったり、日本記録保持者の池江璃花子選手も170cmだったり日本トップ選手たちも高身長の人が多いのである。つまり、私は水泳においてとても不利な体つきをしているということになる。

私はいつだって速くなりたいとは思いつつも、「私は他の人より背が低いから速くなれなくてもしょうがない」と心の底では感じていた。私は低身長の手先の選手の中ではよく頑張っている方で、私より背が低くて速い選手なんてそうそういないと本気で思っていた。一緒に泳いだときに、私が負ける相手はだいたい高校生や背の高い人だったことも私がそう考えてしまう理由の一つだったかもしれない。

そんな私の希望的観測は今年の大会で壊された。県大会出場がかかっている大事な大会で、私の隣のレーンで泳ぐ女の子は私より背が低く、小柄だった。私は正直彼女を見くびっていた。この人には勝てるのではないかと。だけど、いざ泳ぎだすと私が彼女に追いついたのは最初の折り返しまでだった。その後からは惨めになるほど差が開いていった。なんとか県大会出場にはこぎつけたものの、その嬉しさより「私より背の低い選手に負けるなんてあり得ない」という動揺や悔しさのほうが勝っていた。

その後も親や周りの人たちは「その身長でよく頑張ったね。」と言ってくる。そのたびに思う。じゃあ私より背が低くて私より速かったあの女の子は何なんだろう。どうしてあんなに速いのか疑問でしかなかった。だけど、本当は私もあの子はたくさん努力をしてきたから速いということを理解している。速い人なら誰だってそうだ。オリンピック選手だってただ背が高いから速いんじゃないって苦しい練習を乗り越えてきたから速いのだ。今まで私は低身長を言い訳にしてきた。きっと、私自身で私の可能性を閉ざしてきたのだろう。努力をしたって結局は体格に恵まれた人たちには勝てないと決めつけていたのだ。なんと情けなく、かっこう悪いことだ。身長なんて言い訳にはならないし、私自身言い訳にしたくない。背が低く生まれてきてしまったのなら、そのハンデを覆すほど努力すればいいだけのことじゃないか。その努力を私は怠ってきたから、悔しさが残る結果となったのだ。その努力の大切さを理解し、本気で速くなりたいと思ったからあの子は速くなったのだ。こんな単純なことに気づくのに時間がかかりすぎてしまったような気がする。

どんなスポーツにおいても生まれながらの身体的な有利・不利はある。そのように生まれてしまったものはもうどうしようもない。だからといって、最高到達点まで行ける可能性が消えてしまうわけでは決してない。自分の個性と向き合って、それらを活用する方法を考え努力してきた者が栄光を掴むのだと私は思う。

私の将来の夢

川越市立芳野中学校 3年 ^{こいけ} ^{ゆい} 小池 結衣

私の夢は、動物の命を大切にできるペットショップの店員になることです。小さい頃から動物が好きで、家でも犬を飼っていて、私がつらい時や悲しい時、そっと寄り添ってくれるその存在に何度も救われてきました。動物は言葉を話せないけれど、その表情や仕草には心がこもっていて、いつも人の気持ちに寄り添ってくれる大切な存在です。だからこそ、私は将来、動物の命にしっかりと向き合える仕事がしたいと思うようになりました。

しかしある日、テレビのドキュメンタリー番組で見た「ペット業界の現実」は、私の心に強く残りました。そこでは、売れ残った子犬や子猫が処分されていたり、命を生み出すためだけに使われる「繁殖犬」として劣悪な環境に閉じ込められていたりする犬たちの姿が映されていました。私が知っていたかわいいペットショップとはまた違う現実が、そこにはありました。命を大切にしているように見えて、実は「売れる命」と「売れない命」とを分け、商品として扱っている姿に、深い悲しみと怒りを感じました。

私たちは学校で「人権」について学んでいます。人は誰でも、平等に大切にされる権利があり、命や自由、幸せに生きることが保障されています。それを守ることが、社会のルールであり、人としての責任でもあると教えられてきました。

けれども、動物には人権がありません。だからといって、命としての価値が人間より低いということにはならないと、私は思います。言葉を話せないから、文句を言わないからといって、苦しめないことにはなりません。悲しみ、怖さ、うれしさ、動物たちもちゃんと感じています。その気持ちを想像すること、理解しようと努力することこそが、命を大切にできる第一歩だと思います。

人権を学ぶということは、ただ人間同士の権利について知るだけでなく「すべての命を尊重する心」を育てることだと思っています。

私は将来、ペットを「売る」だけの場所ではなく「命と人をつなぐ」場所を作りたいと思いました。動物を迎える前には、どんな生活が必要なのか、どんな性格なのかをしっかりと伝え、本当にその子の命を責任をもって守れる人だけが家族になれるような仕組みにしたいと思っています。また、保健所に保護された動物たちを引き取り、新しい家族を探す活動もしていきたいです。見た目のかわいさや種類だけで選ぶのではなく、その命の重さや背景を知ってもらえるような工夫をしたいです。

命は、決して使い捨てできるものではありません。簡単に手に入る命ほど、簡単に手放されるという現実もあると知りました。だから私は、ペットショップという形を通して「命を買う」ことの意味を社会に問いかけていきたいと思いました。そしていつか「売る」ではなく「つなぐ」ことが当たり前の中になってほしいと願っています。

人の命も、動物の命も、一つとして同じものはありません。性格も、育ち方も、感じ方もそれぞれです。その一つひとつの違いを認め、大切に合わせる社会を作ることが、人権を守ること、そして命を守ることにつながるのではないかと考えています。

これから私は、動物に関する知識だけでなく、人の気持ちを理解する力や、命と向き合う責任感を身につけていき、そして将来、命に寄り添うペットショップを実現し、人にも動物にもやさしい社会づくりに協力できる大人になりたいと思っています。

私の長い病との戦い

川越市立高階西中学校 2年 ^{まつした}松^{さくや}下^{はら} 朔也

私は病気にかかっています、今でも治っていません、でも幸せです。そのことについてお話しします。

皆さんは「重症筋無力症」という病気を知っていますか。まぶたが下がってしまい、目の見方によっては、ものが二重に見えたりする、更に、全身が疲れやすくなることもある病気です。私は3歳になったときに両目のまぶたが垂れてきて、歩けなくなってしまいました。慌てて両親が小児科に私を連れて行ったところ、大きな小児病院を紹介されました。その時は「脳腫瘍」ではないかと言われたそうです。けれども検査の結果、その病院での診断は「重症筋無力症」という病気でした。そこから私は、約4ヶ月程、入院しました。4歳の時には、「白血病」にもかかりました。4歳のときに白血病の治療を行い、それが終わると、やがて重症筋無力症の症状も軽くなっていきました。そこからは学校に行ったり、自分のやりたいことをすることができました。

しかし、その喜びも束の間でした。小学3年生のときに重症筋無力症が再発して、入院することになりました。小学3年生の私にとって、1ヶ月の入院はとても長く、深い絶望を感じました。入院中に両親がお見舞いに来てくれましたが、当時はコロナ禍の影響で、面会時間が4時間までと決められており、まだ幼い私は心細かったことを覚えています。その後も私は、何度か入退院を繰り返しました。

入院中は辛いことや大変なことがたくさんあります。例えば、医師が点滴の針を刺してくれるのですが、どうやら私の腕にはうまく刺せないようで、何度も針を刺されました。すると、腕があざだらけになってしまうのです。また、トイレに行くときやお風呂に入るとき、検査をするとき以外は常に病棟のベッドの上で過ごします。さらに点滴の針が薬を血液に入れるためのチューブにつながっている間は、お風呂に入ることすらできません。体を動かすことが極端に少なくなってしまうのです。

そして何より一番辛かったのは、やることが制限され、自分の好きなことができなくなることです。成長するにつれて、色々な楽しみも増えている中、私がもっと大きくなったら、より行動の幅が広がり、今以上に楽しいことが沢山できるようになると信じています。友人や恋人などと遠くへ行ったり、買い物をしたり、私はこれからやりたいことが数え切れないほどあります。夏休みはやりたいことをする時間が沢山あるのに、入院しなければならぬのは、とても苦痛なことでした。入院して何もできない自分だけ取り残されたような気分になり、貴重な時間を奪われた喪失感に襲われていました。

でも、素敵な時間が訪れました。心配した友人達が私に優しく声をかけてくれたのです。私はその時、自分の心に刻まれていた入院の嫌な出来事が薄くなっていったと感じました。そして友達や家族、学校と病院の先生、入院中に私のことを助けてくれた看護師の方々などが励ましてくれたり、応援をしてくれて、私は幸せだと思いました。また入院して帰ってきた時に、私を支えてくれる人達が待っていてくれると思います。

今、そしてこれからの私が努力すべきことは、今もなお闘い続けている重症筋無力症について不安と心配な気持ちを抱かないようにすることです。また「これから必ず元気になる」「元気になったら私のことを励ましてくれた方々たちにお礼をしたい」という希望を抱くことが私にとって大切なことだと思います。

私は入院を通して、健康で何気ない日常の生活がいかに幸せかを感じました。私の病気はまだ治っていませんが、私のことを応援してくれる人、支えてくれる人がいて、私のやりたいことが実現しています。そしてまた、これからやりたいことが思い浮かんでいます。だから私は幸せです。

将来

川越市立高階西中学校 3年 阿曾 莉己

「将来の夢はなんですか？」

14年間生きてきたなかで何度聞かれたことか。この質問をされると、ちょっと黙ってしまう。昔なら、「水泳選手になりたい!」「ケーキ屋さんがいいな」なんて元気にいえたのに、今は「まだ分からない」としか答えられない。周りの友達の中には、「看護師になりたいから専門学校に行きたいな」「美容師を目指してる」とはっきり言える子もいる。そのたびに、夢がない自分に対して嫌悪感や焦りを抱いてしまう。最近、高校の説明会に行くことも増えて、進路の話が現実的になってきた。「将来やりたいことに合った学校を選ぼう」と言われるけど、そもそもどんなことをやりたいのか分からない私にとって、それはすごく難しい。しかも今の時代は、職業の選択肢が多すぎる。昔は「公務員は安定」「大企業に入れば安心」なんていわれていた時代があったらしい。

しかし、今はAIがどんどん進化して、今ある仕事が10年後にはなくなるという話もよく耳にする。実際、セルフレジや工場の単純なライン作業など人が必要のない仕事が増えてきている。チャットGPTのようなAIも、すでに様々な仕事をサポートできるほど進化しており、正直驚いている。今、当たり前にあるだろうと思っているような仕事が、10年後にはなくなると思うと、10年後の「当たり前」なんてちっとも想像できない。そんな中、「将来の夢を1つに決めなさい」なんて言われても、正解がどこにあるのか分からない。

私は、SNSを見るのが好きで、いろいろな人の働き方や生き方を見ている。東京の会社を辞めて地方で農業を始めた人、世界中を旅しながらパソコン一つで仕事している人。「自由でいいな」と思う一方で、「私は何がしたいんだろう」と思ってしまう。最近、「Z世代」や「タイパ重視」という言葉で私たちの世代が語られるけれど、そんなに器用じゃない。夢を持つことすら難しく、進路もよくわからなくて、自分の将来に自信が持てない。でも、「今をちゃんと考えたい」という気持ちはみんな持っていると思う。

ある日、SNSで見た「今の時代は、夢がある子より、夢を見つけようとしている子のほうが強いんだよ」という言葉に、私は少し救われた。たしかに、今の社会は正解が一つじゃない。だから、迷ってもいい。間違えてもいい。やりたいことが見つからなくても、自分なりに考えて、動いてみるのが大切なんだと思う。

私は今、「夢が決まっていない自分」に、少しずつ向き合っている。自分の興味があること、得意なこと、やってみたいと思えることを、メモ帳に書いてみたり、学校説明会に行ってみたりと、小さな行動から始めている。進学も、将来も、「ひとつにしぼる」ことだけが正解じゃない。高校で見つけることがあってもいいし、大人になってからやり直す人もたくさんいる。だから、今この時点で完璧に決めなくていいんだと思う。夢は、最初から完成された形で目の前に現れるわけじゃない。少しずつ作っていくものなんだと思う。今はまだぼんやりしているけれど、私なりのペースで、自分の未来を探している途中だ。たくさんの選択肢がある今の時代だからこそ、自分らしい未来を選びたい。そしていつか、「あのとき迷ってよかった」と思える日がくるように、焦らず、一歩ずつ前に進んでいきたい。

◆ 入 選 ◆

選挙の大切さについて

川越市立砂中学校 2年 こんどう ひさよし
近藤 久義

みなさん、選挙について関心や興味を持たれたことはありますか。僕はあります。今回のテーマを「選挙」にした理由は、国の未来へつなぐ大事な国民の意見を反映できるところに強く関心をもったからです。大人が選ぶ1票が僕達の未来を決めている。そう思うと、まだ選挙権のない僕達にとっても選挙は決して他人事ではないと思いました。

「選挙に行っても何も変わらない」と思ったり聞いたりすることがあると思います。しかし本当にそうでしょうか。選挙は僕達の望む社会の姿を、政党もしくは政治家に伝えるための大切な手段です。例えば環境問題の解決、地方の過疎化の解決などの願いがあるとします。これらの願いは、もしかしたら選挙で選ばれた人が実現してくれるかもしれません。投票は、単に誰かに1票を投じる行為ではなく、僕たちの未来に対する「こんな社会になってほしい」という意思表示だと思っています。

政治は、難しい言葉が飛び交うニュースや国会での議論などで、僕達の身の回りからは遠い存在だと思われがちですが、身の回りにも政治はたくさんあります。税金や、国民の食事の安全対策、道路の舗装など日々の暮らしのたくさんのが、政治によって決められています。これらの意見を反映させるためには、僕達の政治への興味と選挙という形で声を届けることが大切です。

「どうせ若い世代の意見なんて聞いてくれない」と思うかもしれません。しかし、日本の選挙では投票率が低いことが問題視されています。特に若い世代の投票率は、他の世代と比べ低い傾向にあります。序盤の方で述べた「選挙に行っても何も変わらない」はこういう背景があるからそう受け取ってしまうのかもしれませんが。話を戻すと、もし僕達のような若い世代が勢揃いで選挙に行き、自分たちの考えを確実に示したら、どうなっていたのでしょうか。政治家たちは、若い世代の声にも耳を傾けるかもしれません。僕達一人ひとりの選挙への興味や関心が社会を変える大きな力になります。

今この作文を書いている18歳以下の僕はまだ選挙権を持っていません。しかし、何もできないというわけではありません。まず、政治や社会の出来事に興味を持つこと。今ではYouTubeでも「選挙」という言葉などで調べると、多種多様な意見が出てきます。それらに目を通してみる。そして選挙権を持つその時まで、自分の考えを今からでも持っておくこと。この他にもあると思いますが、これが今の僕達にできることだと思います。

政治は一部の大人が考えるものではなく、みんなで考えるという意識を持つことが大切です。僕達の未来は誰かに任せるものではなく、僕達が創っていくものです。選挙は、その未来を作るための重要なスタートラインです。将来、僕が投票できる年齢になったら必ず選挙へ行き、未来を決める1票を投じたいと思います。それが、僕達一人ひとりが良い社会を築くための一歩だと信じているからです。

私にとっての「学ぶこと」

川越市立霞ヶ関西中学校 3年 ^{とみた} 富田 ^{みゆ} 望結

私たち学生にとって一番身近なもの、それはやはり「学ぶこと」だと思う。しかし、どうして学ぶのか、学ぶとはどういうことなのかを深く考えたことのある人はどのくらいいるだろうか。私たちはよく「将来のために勉強しなさい」と言われる。たしかに、学ぶことは進学や就職のために必要だ。しかし、私は「学ぶこと」の本当の意味は「自分の世界を広げること」にあると考える。たとえば歴史を学ぶと、私たちは過去の人々の考え方や生き方を知ることができる。温故知新という言葉があるように現在では見出せなかった価値観に気付けるかもしれない。国語や英語を学べば自分の思いや考えを他者に伝える手段が増え、また他者の考えをもとに、自分の考えを改めることもできるようになる。このように学びは私たちの視野を広げ、新しい視点をもたらしてくれるものだと思う。学ぶことによって世界はより広く、より深く見えるようになる。学びは知識の量で優劣をつけるのではなく、自分自身を少しずつ変えていくことに価値があると考えます。それを通し、私は自分自身の人生を豊かにするために学ぶのだと考える。新しいことを知ったときの「なるほど!」という気持ちは人生に小さな喜びをあたえてくれる。

「学ぶこと」は教えてもらうだけでなく、自分で問題を見つけ追及していくことだと思う。わからない問題には何がわからないのか、どうすれば解決できるのか、を考える必要がある。しかし、それは学ぶことに限った話ではなく、実際に起こっている問題についても言えることだと思う。難しければ難しいほどはっきりとした答えはそう簡単に出てくるものではない。その中でも最善策を考え続ける力が学ぶことで身につくのではないだろうか。

私は実際に、わからない問題に出会ったとき、ただ答えを知るのではなく、なぜそうなるのか、どうすれば解決できるのかと自分で問いを立てるようにしている。そうすることで理解が深まるとともに、次に似た問題に出会ったときにも応用できるようになる。

社会の大きな問題も同じだ。環境問題や戦争のように簡単に解決できないことはたくさんある。しかし、人々が学び続け、あきらめずに最善策を考え続け、どうすれば良いのかわからないこともわかるまで追求し続けることで少しずつ未来を変えていくことができる。

このように、学ぶことは単に知識を得るだけではなく、自分自身の視野を広げ、よりよい答えを探し続ける力を育ててくれるものだ。ときには難しい問題にぶつかり、すぐに解決できないこともあるだろう。しかし、そのようなときこそ学び続ける姿勢が生きてくるのだと思う。わからないことをわからないままにせず、自分で問いを立て考え続けること、その積み重ねが人生を豊かにしていくのではないだろうか。

私はこれからも、学びを通して自分の世界を広げていきたい。小さな発見に喜びを感じ、大きな問題にもあきらめずに立ち向かえるようにしていきたい。難しい問題に出会ったときでも、あきらめずに考え続ける姿勢を大切にしたい。そうすることで、すぐに答えが出なくても、少しずつ前に進むことができると思う。

学び続けることは私の人生を豊かにし、成長させてくれるだろう。学ぶことを通して自分自身を磨き、よりよい人生を歩んでいきたいと思う。

◆ 入 選 ◆

繋げたい想い

川越市立川越西中学校 2年 ^{はせべ}長谷部 ^{りお}莉央

陸上競技は個人戦ではなく団体戦である、と最近思うようになりました。陸上競技部に所属して約1年が経ち、私たち2年生は3年生から部活動を引き継ぎました。全体の目標や練習内容を考えるときは、必要なことは何だろうと思いつながら、部員全員の顔が浮かびます。自分のベストの記録を目指すだけでなく、3年生が教えてくれた想い、感謝する気持ちを陸上を通して私は繋いでいきたいと考えます。

私には忘れられない思い出があります。それは、学校総合体育大会でのリレーです。リレーにおいてバトンパスはとても重要で、前後の人が息を合わせます。私たちのメンバーは、県大会出場を目標としていました。私は途中からリレーのメンバーになったため、分からないことも多くありました。3年生にたくさんのアドバイスをもらい練習を重ね、メンバー全員が心を一つにすることで、本番では自分一人だけでは出せない力が出たと感じました。全員の強い思いが繋がり、目標であった県大会に出場がきまったときは、嬉しくて感謝の気持ちでいっぱいになりました。この経験を通して、一人では難しいことも、支え合えば乗り越えられるということを知ってもらいました。

2年生になって迎えた大会も、1年生のときとは少し違うように周りが見えて、心が動いた経験となりました。「県大会、頑張ってるね。」と3年生が他校の選手から声を掛けてもらっている様子は、一瞬の出来事でしたが、大切な意味を持つと感じました。さっきまで競っていた学校という枠を超えて、応援する、感謝を伝える、素敵な関係を築いている姿に感動しました。

そして、そのような姿は、世界陸上選考会のニュースでも見る事ができました。今年の9月に世界陸上があります。代表の切符を手に入れるための真剣な様子が伝わってきます。特に印象に残ったのは女子100メートルハードルの決勝です。スピードに驚いたのはもちろんですが、走り終えた後すぐに全員が笑顔で話したり、ねぎらい合ったりし、順位が発表された後は全員での写真撮影が始まり、見ているこちらも楽しい気分になりました。正々堂々と戦い、走り終えると敵や味方は関係なく、同じ競技の分かり合える仲間なのだと思います。一生懸命練習しているのだから自分が一番良い舞台に立つことができればそれで良い、という意見もあると思います。しかし、仲間を応援し支え合うことで不思議といつも以上に力が湧く経験があるように、結果を求めるだけでなく、好きな陸上を通して、たくさんのことを学んでいけるといいなと思います。ある選手は、「良い対戦相手がいるからこそ、自分が強くなれる。」と言っていました。私も感謝の気持ちを大切にしたいと思い、心に残っています。

私は今、スタート地点に立っていると考えると、ゴールの先にあるものは新たな目標だったり、感謝の気持ちだったり、どのような感情を抱くのかは自分自身の日々の行動次第で変わってくるものだと思います。これから1年間、チームのために、後から続く1年生のために、そして自分のために精一杯走り出し、3年生から渡してもらったバトン仲間と一緒に繋いでいきたいと思っています。

◆ 入 選 ◆

地域コミュニティの大切さについて

川越市立鯨井中学校 3年 まつなが 松永 ゆうすけ 悠佑

私は、地域コミュニティはとても大切な役割だと思います。地域コミュニティは、自分たちが住んでいる地域をよりよくするために、地域住民が協力し合い助け合っていくつながりのことです。

今は生活が便利になり、インターネットの普及により、個人の生活が中心になっていると感じますが、だからこそ地域のつながりを大切にすることが、これからの社会には必要です。

私は特に、地域の文化の保護と災害時の助け合いという2つの点から、地域コミュニティの大切さを考えました。

初めに、地域文化の保護についてですが、日本には古くから伝わる行事や風習がたくさんあります。私の住んでいる地域には、市指定文化財の「鯨井の万作」があり、昔から続くお祭りや伝統的な踊りがあります。この伝統文化を伝承するには、地域の人たちの協力が不可欠です。たとえば、夏祭りのときには、鯨井万作保存会の人や近所の年配の方々が、笛や太鼓を教えてくれたり、踊りを教えてくれたりします。私たちも、小学生の頃から、踊りに参加したり、提灯を作ったりして、一緒に祭りを盛り上げています。こうした活動を通じて、私は地域の伝統を学ぶことができ、昔から地域に愛されている地域文化を受け継ぐことの大切さを実感しています。

しかし、もし地域の人たちがこのような地域文化に関心をもたず、関わることをしなくなったら、地域の伝統は失われてしまいます。

地域文化を学ぶことは、学校の授業だけでは学べないことが多く、地域の人と関わり、体験する中で、文化を伝承することの重要性を認識することができます。そして、その地域コミュニティがあることにより、地域の文化を次の世代に伝えていく中で、自分の地域に誇りを持ち、郷土愛を育むことができるのではないかと思います。

次に、災害時の助け合いについてですが、最近、地震や台風などの自然災害が発生したときに、近所の人々が協力し合って避難したり、食べ物や水を分け合ったりしたことで、多くの人々が助かったという話を聞きました。このような状況に見舞われたとき、大きな力となるのが、地域コミュニティの役割です。日ごろからあいさつをしたり、地域の行事で顔を合わせたりしていると、いざというときにも安心して声をかけ合うことができます。

私の両親は、自治会の役員をしているため、地域の方との交流が多いので、自然と私も顔を覚えてもらい、声をかけてもらう機会が多くなりました。そのため、災害などで困ったときには、助け合いがスムーズにできるのではないかと実感しています。また、定期的に、地域での防犯パトロールや避難訓練を実施していますが、このような活動も、地域コミュニティの輪を広げる重要な活動ではないかと強く感じています。

災害や事故はいつ起きるかわからないからこそ、日ごろから地域の方々とのつながりを大切にしておくことは、とても大事だと思います。

地域コミュニティには、「誰かが困っていたら助ける」「地域のことはみんなでする」というあたたかい気持ちがあふれています。

私も地域の一員として、そうした気持ちを持ち続けたいと思います。そして、これからも地域行事に参加したり、近所の人とあいさつを交わしたりして、自分のできることから地域とのつながりを深めていきたいです。

今、人と人との関係が希薄になってきていると言われてはいますが、どんなに時代が変わっても、地域のつながりは人間らしく生きるために必要なものだと思います。だからこそ、私は地域コミュニティをもっと大切にしていきたいです。

僕が勉強する理由

秀明高等学校 1年 はぎわら やまと
萩原 大和

なぜ、僕は勉強をしているのだろう。

ある日、机に広げたノートと向き合いながら、ふとそんな問いが浮かびました。国語、数学、英語、理科、社会。毎日、決められた時間割に沿って教科書を開き、黒板を写し、テストのために暗記する。それが「学習」だと信じてきたのです。もちろんテストでいい結果を取れば嬉しいし、次へのモチベーションとなります。でも、それだけでは足りない気がしてきました。

そんなとき、同居している祖父と話をする機会がありました。祖父は78歳になった今でも、専業農家をしています。真っ黒に日焼けした強靱な体に幅広い知識を持つ祖父に、僕は幼いころから憧れていました。「今は学校で何の勉強をしてるんだ。」と聞かれ、僕は数学の3次関数や英語の文法のことを話しました。祖父は少し笑って「その知識を大人になって全部使うわけじゃないよ。でも、勉強すること自体に意味があるんだ。」と言いました。その言葉は、僕の胸の奥に小さな火を灯したようでした。

僕は、その言葉の意味を探るように、日々の学習を少し違った目で見始めました。数学の問題は、ただ計算ではない。試行錯誤を繰り返す中で「考える力」や「粘り強さ」を鍛えてくれます。英語は、外国人と話せるという世界へ導いてくれます。歴史は、過去の出来事を知り、未来を考えるための手段となります。そして理科は、自然の仕組みを知り、世界をより深く感じるための鍵となります。

気づいたのは、学習とは「知識を集めること」だけでなく、「自分を成長させるための練習」だということです。僕がサッカー部で練習をするのは、試合に勝つためだけでなく、自分の体やチームワークを鍛えるためでもあります。同じように、勉強も僕の頭や心を鍛えるためのトレーニングだと思います。問題が難しく嫌になるときもあるけれど、それを乗り越える経験そのものが、僕の力になっていくのです。

もう一つ、僕が大事だと思うのは、学習が「自分を知るきっかけ」になるということです。勉強していると、「これは面白い！」と夢中になる科目もあれば、「これは苦手だな」と感じる科目もあります。その好き嫌いは、僕が将来どんな分野に興味を持ち、どんな道を進むかを考えるヒントになります。もしかしたら将来、今の勉強が直接役立つことはないかもしれませんが、でも、学習を通して自分の得意や興味を知ること、一生に関わる大きな財産になると思います。

また、学習は人と人をつなぎます。学校で友達と問題を解き合ったり、意見を交換したりすると、知識だけでなく人間関係も広がります。時には意見がぶつかることもあるけれど、それも含めて僕は学んでいるのだと思います。単に答えを知るだけでなく、相手の考え方を理解することも学習の一部です。

今の僕にとって、学習する意味ははっきりしています。それは、「未来の自分を形作ること」です。昨日より多く知ること、明日には少し深く考えられるようになる。その積み重ねが、僕を僕らしくしていく。戦後の高度成長期にあえて大学へ進学し、家業の農業という職業を選択した祖父の言葉が、今ならわかります。学習とは、僕が僕になるための、そしてまだ見ぬ世界に向かうための終わりのない旅なのです。

(参考) 学校別の応募状況

部門	応募学校	応募作品数 (編)
中学生の部	川越市立初雁中学校	90
	川越市立富士見中学校	258
	川越市立野田中学校	220
	川越市立城南中学校	30
	川越市立芳野中学校	55
	川越市立東中学校	76
	川越市立南古谷中学校	40
	川越市立高階中学校	1
	川越市立高階西中学校	78
	川越市立寺尾中学校	50
	川越市立砂中学校	106
	川越市立大東中学校	20
	川越市立霞ヶ関東中学校	4
	川越市立霞ヶ関西中学校	54
	川越市立川越西中学校	25
	川越市立名細中学校	130
川越市立鯨井中学校	9	
高校生及び一般の部	川越市立川越高等学校	4
	県立特別支援学校 塙保己一学園	7
	秀明高等学校	97

**令和7年度 川越市少年の主張作文
～未来を担う私たちが、いま思うこと～
入選作品集**

発行日： 令和7年11月

編集・発行： 川越市青少年を育てる市民会議
(川越市役所 こども育成課内)

住所： 川越市元町1丁目3番地1

電話： 049-224-5724



川越市シンボルマーク